

オープンキャンパスの参加形態が志望決定に及ぼす影響

——東北大学を例として——

林 如玉, 宮本 友弘, 倉元 直樹, 長濱 裕幸 (東北大学)

本研究では、ポストコロナ期におけるオープンキャンパスの実施や改善に向けて、2021（令和 3）年度から 2023（令和 5）年度の東北大学新入学者アンケートの結果をもとに、オープンキャンパスの参加形態が入学者の志望決定に及ぼす影響を検討した。半数以上の入学者は自分が入学した学部 of オープンキャンパスに何らかの形態で参加したことが確認できた。また、参加したオープンキャンパスが本学への志望決定の「決め手となった」割合については、対面とオンラインの両方による参加経験者が、一方だけの参加経験者より高かった。このことから、オンラインと対面の融合はハイブリッドといった物理的な複合だけではなく、個人の内面における体験の多元性といった点にも着目していく必要があることが示唆された。

キーワード：オープンキャンパス、参加形態、志望決定

1 はじめに

1.1 背景

1985（昭和 60）年の臨時教育審議会第 1 次答申においては、「受験機会の複数化への配慮」が述べられ、同時に大学から情報を提供する重要性も強調された（臨時教育審議会, 1985）。その後、18 歳人口の減少と大学数の増加に伴い、入試広報活動は受験生の獲得にも直結し、現在では入試広報活動は大学にとって不可欠なものとなった（倉元ほか, 2020）。

東北大学では、1999（平成 11）年に設置されたアドミッションセンター（現在の入試センター）が主導し、入試広報活動を展開してきた。実施してきた入試広報活動のうち、参加者数が一番多く、入試広報の看板となる活動が「オープンキャンパス」である。新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）流行前の 2019（令和元）年度に実施されたオープンキャンパスの来場参加者数は、過去最高の 68,403 名であった。規模が大きいだけでなく、2020（令和 2）年度の新入学者の半数以上がオープンキャンパスに参加した経験があり、入学した学部等の志望決定にあたって強い影響を及ぼしていることが示唆されてきた（久保ほか, 2023）。ここまでは対面による実施に限定された話である。

2020（令和 2）年度はコロナの感染拡大の影響で、通常 7 月末に行われる対面のオープンキャンパスが中止となった。同年度に代替措置としてオンラインオープンキャンパスが初めて導入された。2021（令和 3）年度は、事前申し込みや人数制限などの工夫を凝らして対面での実施を計画したが、コロナ第 5 波の

時期と重なり、やむ得ず中止となり、オンラインのみの実施となった（宮本, 2022）。2022（令和 4）年度は、感染対策を考慮した上で、対面による実施を一部再開し、オンラインと対面の両方で実施したが、人数制限を設けたため来場参加者数は 5,680 名にとどまった。2023（令和 5）年では、コロナに対する感染症法上の位置づけの移行に伴い、オープンキャンパスも従前の対面形式に戻った。

東北大学では、オンラインオープンキャンパスを導入した最初の 2020（令和 2）年度では、各学部学科の紹介動画、模擬講義の動画、在学生による紹介動画、資料の閲覧ページなどが主要なコンテンツだった。その後の 2021（令和 3）年には、紹介動画に加えて質疑応答を行うライブイベントや AR 記念写真撮影コンテンツ等を追加した。さらに、オンラインでも「実感や体験」できるよう、2022（令和 4）年度のオンラインオープンキャンパスにライブイベント、VR キャンパスツアーと AR フォトフレーム等のコンテンツを導入した。

コロナ禍の 2021（令和 3）年度～2023 年度（令和 5）年度の 3 年間における本学入学者にとって、対面でオープンキャンパスに参加する機会は限られていた。これらの入学者はオンラインだけ、対面だけ、オンラインと対面の両方といった多様なオープンキャンパスへの参加経験を持つ可能性がある。そうした参加形態の違いが、本学の志望決定にどのような影響を及ぼしたのであろうか。本研究では、この問いに対して実証的に検討をしようとするものである。

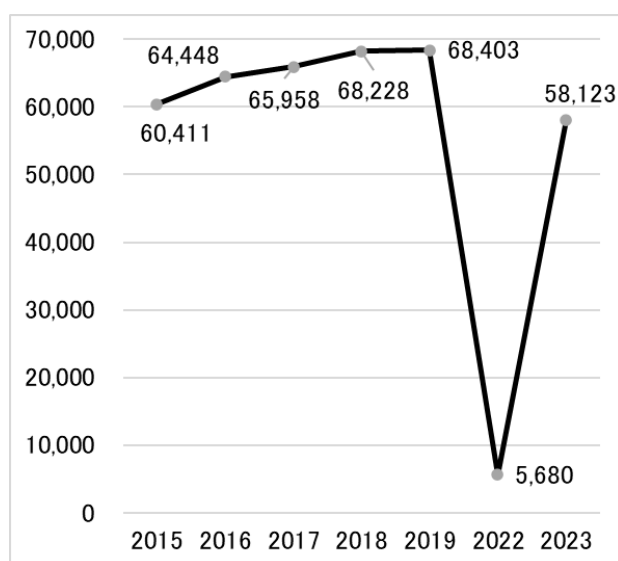


図1 対面オープンキャンパス参加者数の変遷

コロナ禍におけるオープンキャンパスの効果についての研究として、永田ほか（2022）は、2020 年度オンラインオープンキャンパスの参加者を対象にインタビュー調査を行い、参加者の満足度が高いことを報告している。さらに、大学から遠距離に居住している人にとっては、オンラインオープンキャンパスは良い情報収集の機会となっていることが確認された。この研究はオンラインだけという参加形態のオープンキャンパスに対する満足度に焦点を当てて、検討したものである。

また、三好（2022）は、コロナ禍前の2019年に対面オープンキャンパスに参加した高校生とコロナ禍の2020年にオンラインオープンキャンパスに参加した高校生を対象に、オープンキャンパス参加後の当該大学への進学希望の変化や得られた情報等について質問紙調査を行った。その結果、オンラインも対面も志望を促進させることがわかった。この研究は対面とオンラインの2つの参加形態の比較であり、オンラインと対面の両方による参加形態は検討対象の中には入ってなかった。田崎ほか（2023）は、オンライン型と対面型の差異に着目し、2019年に開催された対面オープンキャンパスと2021年に開催されたオンラインオープンキャンパスの参加者を対象にアンケート調査を実施した。その結果、オンラインへの参加は志望順位を高める効果を持たないことが示され、オンライン参加者には事前に志望程度が高い者が多く含まれていると解釈している。

上記の各調査対象者はオープンキャンパスの参加者であり、実際に受験あるいは入学したかまでは検討さ

れていない。単に参加者を対象とする調査では、広報活動に興味を示したが最終的に入学しなかった層が含まれるため、出願意欲に対する実際の効果が曖昧になる可能性があると考えられる。一方、入学者が参加した入試広報活動を分析すれば、志望の促進や志望決定に貢献した活動が明確になり、将来的に特定の広報活動へリソースを集中させるための判断材料にもなる。

実際の大学入学者を対象にオープンキャンパスの効果を検討したものとして、久保ほか（2023）が挙げられる。東北大学では、毎年、4月入学した学部1年生を対象に、「新入学者アンケート」調査を実施している。久保ほか（2023）は2022（令和4）年度の調査結果を用いて、オンラインオープンキャンパスは海外を含めた遠隔地域からのアクセスの可能性を高めていることが確認できた。しかし、対面と比較すると、本学への志望決定の「決め手となった」と回答した者の割合が減少していることが指摘されている。ただし、この研究の対象者は対面によるオープンキャンパスに参加する機会は2019（令和元）年度、1年生時のみであった。

1.2 目的

本研究では2021（令和3）年度から2023（令和5）年度の3年間の新入学者アンケートを用いて、オープンキャンパスへの多様な参加形態が本学志望決定に及ぼす影響を検討する。上記の3年間の調査は、コロナ禍とポストコロナ期のオープンキャンパスへの参加形態を網羅することができ（後述）、今後のオープンキャンパスの実施や改善に向けての知見を提供することが期待される。

2 方法

2.1 調査対象

東北大学入試センターでは、毎年の新入学者を対象に、新入学者アンケートを実施している。本研究では、最初にコロナの影響を受けた年度から、ポストコロナ期に入った2023（令和5）年度までの3年間の新入学者アンケートの結果を分析する。表1には、年度別のオープンキャンパスの実施形態と、各年度の入学者のオープンキャンパスに参加可能な標準学年をまとめた。2021（令和3）年度から2023（令和5）年度の入学者にとって、高校卒業するまでに、対面オープンキャンパスとオンラインオープンキャンパス両方への参加機会がある。

2021（令和3）年度から、新入学者アンケートは入学手続き書類とともに郵便にて新入生に配付し、回

収を行った。配付資料にオンライン回答サイト（Google Forms）にアクセスできる QR コードが記載され、オンライン回答または書面回答から自由に選択できるようにした。アンケートへの回答は任意で、無記名式である。アンケートの回収率について、2021（令和 3）年度は 98.7%，2022（令和 4）年度は 98.9%，2023（令和 5）年度は 97.5%であった。

表 1 年度別オープンキャンパスの実施形態と
入学者の参加可能標準学年

		2018	2019	2020	2021	2022
実施方法	オンライン			○	○	○
	対面	○	○			△
入学者	2021	1 年	2 年	3 年		
	2022		1 年	2 年	3 年	
	2023			1 年	2 年	3 年

注) △：人数制限あり

2.2 調査内容

新入学者アンケートには「回答者の属性」「東北大学の入試」「オープンキャンパスについて」「その他入試広報活動について」の 4 つの部分から構成される。その中で、本研究の分析で使うのは「回答者属性」と「オープンキャンパスについて」の 2 つである。回答者属性のうち、「学部学科」「出身地域」「選抜種類」を分析対象とする。

「オープンキャンパスについて」の部分では、対面オープンキャンパスとオンラインオープンキャンパスの 2 つに分けて尋ねた。それぞれ 3 つの質問があった。最初には、閲覧または参加したかについて回答を求めた。次には、閲覧または参加したすべての学部・学科について、複数回答可の形式で、「文学部」「教育学部」「法学部」「経済学部」「理学部」「医学部医学科」「歯学部」「薬学部」「工学部」「農学部」「医学部保健学科」の 11 項目から選ぶように設定した。学科として、医学部医学科と医学部保健学科の 2 つはあるが、以降、まとめて学部と呼ぶこととする。最後には、オープンキャンパスの参加は回答者が入学した学部への志望決定に与える影響について、「決め手となった」「参考になった」「あまり関係がなかった」「全く無関係」から選択してもらった。2021

（令和 3）年度から 2023（令和 5）年度の新入学者アンケートでは、上記の質問内容は同じである。

3 結果

3.1 属性

3 年間の有効回答者数の合計 7,195 名であった。うち、2021（令和 3）年度は 2,388 名、2022（令和 4）年度は 2,423 名、2023（令和 5）年度は 2,384 名であった。回答者の出身地域について、一部無回答を除く結果を表 2 に示す。関東出身が一番多く、37.8%であった。その次は地元の東北地方で、34.9%を占めている。入学した選抜の種類については、表 3 に示すように、一般選抜の前期日程が 7 割ぐらいで、AOⅡ期が 11.1%、AOⅢ期が 15.0%、両方合わせて 26.1%となった。

表 2 出身地域の分布

	回答者数	%
北海道	205	2.8
東北	2,509	34.9
関東	2,720	37.8
中部	1,157	16.1
近畿	293	4.1
中国・四国・九州	226	3.1
合計	7,110	98.8

注) 無回答は除く

表 3 選抜種類の分布

	回答者数	%
AOⅡ	799	11.1
AOⅢ	1,077	15.0
一般選抜(前期)	4,918	68.4
一般選抜(後期)	290	4.0
その他	94	1.3
合計	7,178	99.8

注) 無回答は除く

3.2 参加形態

3.2.1 参加形態の分類について

対面とオンラインのそれぞれの参加経験の回答を用いて、オープンキャンパス（参加学部等は不問）への参加形態を①対面とオンラインの両方による参加、②オンラインオープンキャンパスのみでの参加、③対面オープンキャンパスのみでの参加、④不参加、の 4 つに分類した。

2021（令和 3）年度から 2023（令和 5）年度の 3 年間、6 割ぐらいの入学者がオープンキャンパスをいずれかの参加形態で体験した。この数値はコロナ前と同一水準を維持している。コロナの影響を受けている時でも、東北大学の入学者は、何らかの方法によってオープンキャンパスに積極的に参加したことがうかがえる。対面のみ参加経験者とオンラインのみ参加経験者はそれぞれ 2 割程度であり、両方とも参加した者は 15.5%であった。

上記の結果は学部不問でのオープンキャンパスの参加状況であり、参加学部を考慮した結果ではなかった。本学のオープンキャンパスは、全学部が参加するイベントであり、進学を希望する学部が明確ではない場合は、いくつかの学部のイベントに参加することも可能である。

本研究では、入学した学部にかかわらず、いずれかの学部のオープンキャンパスに参加したことを包括参加、それに対して、入学した学部のオープンキャンパスに参加したことを学部志向参加と呼ぶこととする。包括参加と学部志向参加の 4 つの参加形態は同じである。

表 4 参加形態の分布

	包括参加		学部志向参加	
	回答者数	%	回答者数	%
両方	1,118	15.5	921	12.8
オンライン	1,526	21.2	1,673	23.3
対面	1,592	22.1	1,298	18.0
参加なし	2,942	40.9	3,303	45.9

注)無回答は除く

表 4 に包括参加と学部志向参加の 4 つの参加形態の分布を示した。学部志向参加の中では、オープンキャンパスに参加したことがある回答者は半数以上であった。オンラインのみ参加した回答者数については、

学部志向参加は包括参加より多かった。包括参加で、両方の参加形態でオープンキャンパスを体験した者のうち、自分が入学した学部のオープンキャンパスにはオンラインのみで体験した可能性はあると考えられる。

包括参加の場合、生徒は複数の学部に関心を持って参加しているため、特定の学部への入学意欲や決定にどれほど影響を与えたかが不明確なところがある。一方、学部志向参加に絞ることで、入学者がどの学部の特化して関心を持って参加したのかを明確にし、その学部のオープンキャンパスがどれほど効果的だったかを直接的に測定することができる。これにより、学部別の広報活動の効果を具体的に検証することもできる。

オープンキャンパスの志望決定に対する実質的な効果を把握するには、回答者が入学した学部等のオープンキャンパスへの参加経験に焦点を当て分析に使うべきである。これからの分析は学部志向参加に絞ることにする。

3.2.2 参加形態の特徴について

図 2 に年度別の参加形態を示した。2021（令和 3）年度入学者の内、オンライン参加は 16.1%、2022（令和 4）年度入学者と 2023（令和 5）年度入学者は 26.0%前後となった。対面での参加について、2021（令和 3）年度の割合は他の年度より高かった。これは各入学年度の前の 3 年間のオープンキャンパスの実施状況と整合する結果となっている。

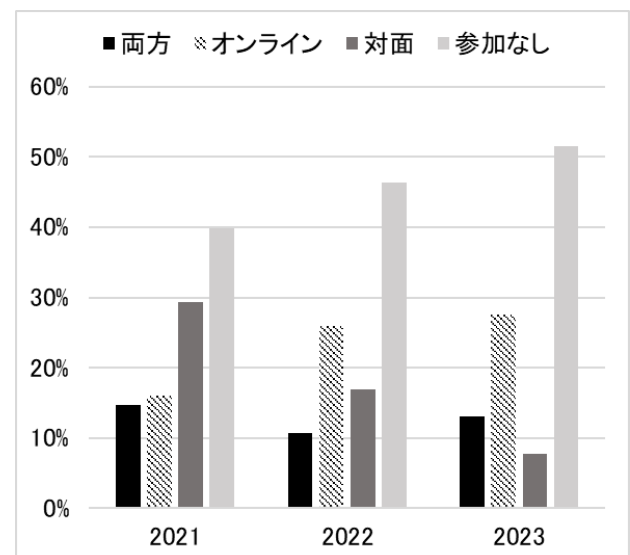


図 2 年度別参加形態

続いて、11 の学部を人文社会系（文学部，教育学部，法学部，経済学部），自然科学系（理学部，工学部，農学部），医歯薬系（医学部医学科，歯学部，医学部保健学科，薬学部）の 3 つに分類し，それぞれのオープンキャンパスの参加形態を図 3 にまとめた。系列の違いを検討するため，系と参加形態のクロス集計表について， χ^2 検定を行った。その結果，人数の偏りは有意であった（ $\chi^2(6)=69.6, p<.001$ ）。残差分析を行った結果，オンラインオープンキャンパスのみと，両方のオープンキャンパスに参加した医歯薬系の学生は他の系の学生より有意に多かった（ $p<.001$ ）。人文社会系の学生において，対面オープンキャンパスに参加する割合は他の系より有意に高かった（ $p<.05$ ）。

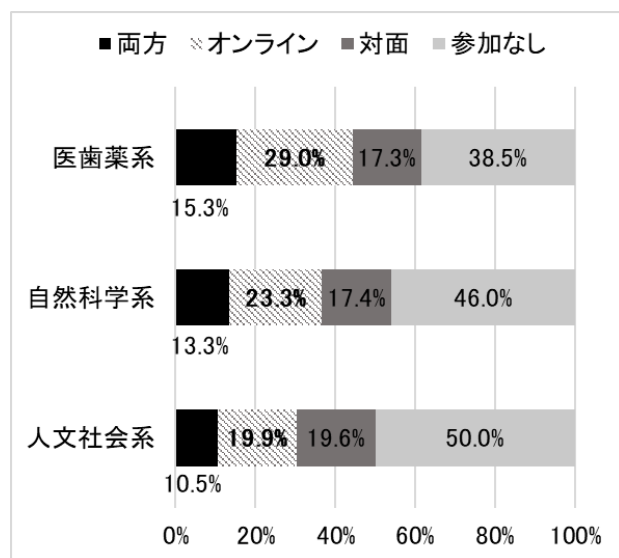


図3 系列参加形態

出身地域別の参加形態を図 4 に示した。両方による参加については，東北地域出身の回答者の割合（24.4%）が最も高く，6 つの地域の中で，唯一 20% を超えた地域である。対面のみになると，東北地域が最も多く（31.4%），続いて関東（12.2%），中部（10.8%）が続く。他の地域の対面参加の割合は 10% 以下であった。これは，距離が近い方，特に東北地域の学生が比較的，東北大学のキャンパスへのアクセスがしやすいからだと推測できる。オンラインのみという参加形態を見ると，中国・四国・九州，近畿，中部，関東，北海道のいずれも 26% 前後を占めていた。東北大学の入学者は日本全域から集まっており，地域性を考慮した上での入試広報活動を行っている

（林ほか，2024）。オープンキャンパスの実施にも地域性が反映され，対面による実施は主に東北の周辺地域に効果的で，遠隔地域はオンラインによる実施でカバーされていることが分かった。地域と参加形態のクロス集計表を作成し， χ^2 検定を行った。結果，有意な差が見られた（ $\chi^2(15)=1187.34, p<.001$ ）。残差分析を行った結果，両方のオープンキャンパスに参加したと，対面オンラインオープンキャンパスに参加した東北地域の学生は他の地域の学生より有意に多かった（ $p<.001$ ）。東北地域出身の学生は東北大学への志望が強く，アクセスも便利のため，積極的に対面またはオンラインオープンキャンパスに参加する可能性が考えられる。

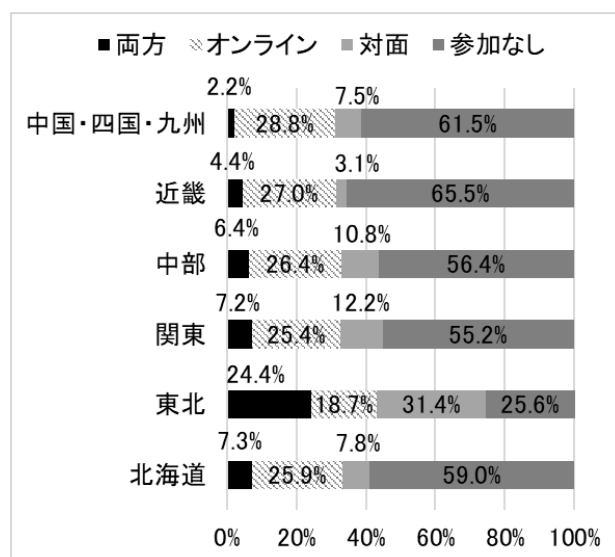


図4 出身地域別参加形態

図 5 には，選抜種類別参加形態の割合を示した。選抜種類別の違いを検討するため，クロス集計表を作成し， χ^2 検定を行った。結果，有意な差が見られた（ $\chi^2(12)=988.72, p<.001$ ）。残差分析を行った結果，オンラインオープンキャンパスのみ，または両方のオープンキャンパスに参加した AOⅡ期と AOⅢ期で入学した学生は他の選抜種類で入学した学生より有意に多かった（ $p<.001$ ）。AOⅢ期の学生は対面オープンキャンパスのみに参加する割合は有意に多かった（ $p<.05$ ）。本学の AO 入試は東北大学を第一志望とする人を求めている入試であり，AO 入試で入学した者はオープンキャンパスに関心を持って，積極的に参加する可能性が考えられる。

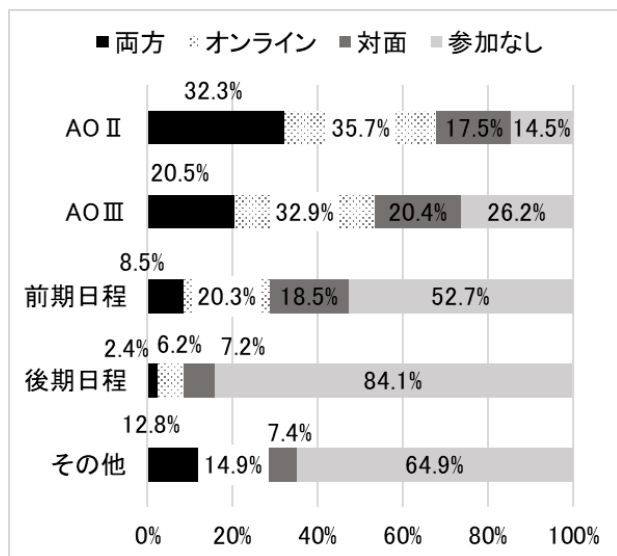


図5 選抜種類別参加形態

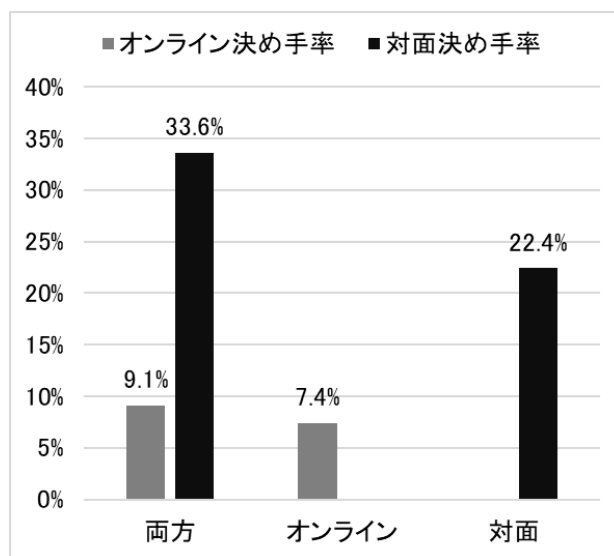


図6 参加形態別決め手率 (全体)

3.3 志望決定に及ぼす影響

志望決定に及ぼす影響という質問は回答者が入学した学部への志望決定に与える影響について尋ねたため、この 3.3 の分析で使う参加形態も学部志向参加の形態である。4 つの学部志向参加形態のうち、「④不参加」を除いて、残り 3 つの参加形態が志望決定に及ぼす影響を検討する。また、回答選択肢には「決め手となった」「参考になった」「あまり関係がなかった」「全く無関係」の 4 つはあるが、本研究では「決め手となった」を回答した割合、決め手率に焦点を当てて分析することにした。

図 6 には、各学部をまとめた全体の決め手率を出した。オンラインのみと対面のみ参加形態を比較して見ると、対面の方の決め手率が高いことが分かった。さらに、対面のみまたはオンラインのみの体験者より、オンラインと対面の両方による参加体験者の決め手率が高かった。

続いて、人文社会系、自然科学系、医歯薬系のそれぞれの参加形態別決め手率をまとめて図 7 に示した。両方参加とオンライン参加の 2 つの参加形態については、自然科学系の入学者は人文社会系と医歯薬系より決め手率が高かった。対面のみという参加形態を見ると、医歯薬系の決め手率は一番高かった。対面で実施されるオープンキャンパスでは、体験型のプログラムやイベントがたくさんあるのは医歯薬系である。実際に機器を操作したり、実験を行ったりすることは対面オープンキャンパスでしかできないことで、このようなことが志望決定の決め手率に正の影響を与えている可能性があると考えられる。

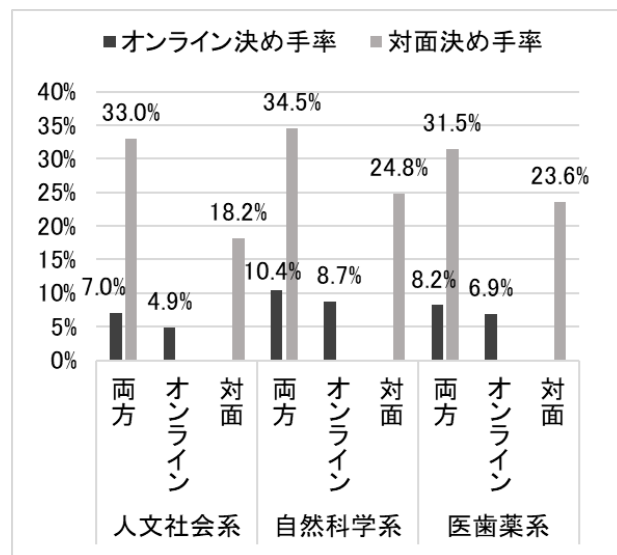


図7 参加形態別決め手率 (系別)

4 まとめ

2021 (令和 3) 年度から 2023 (令和 5) 年度の新入学者アンケートの結果から、包括参加の場合、入学者の 6 割が何らかの形態でオープンキャンパスに参加したことが分かった。学部志向参加の場合でも、5 割超の入学者はオープンキャンパスに参加した。コロナの影響を受けている 3 年間でも、志望を持っている高校生は積極的に本学のオープンキャンパスに参加したことがうかがえる。学部別の参加形態については、医歯薬系の学生は人文社会系と自然科学系の学生より積極的にオンラインと対面の両方によるオープンキャンパスに参加したことが分かった。

ンパスに参加していたことが分かった。出身地域をみると、遠隔地出身の学生はオンラインのみという形態を体験した割合が多く、東北地域の学生は対面で参加したことが分かった。これは久保ほか（2023）と同様な結果である。

選抜種類別に見る参加形態について、AO 入試と一般選抜で異なる傾向が見られた。AO 入試で入学した学生は、一般選抜で入学した学生より、いずれかの形態でオープンキャンパスに参加した割合が高かった。AO 入試による入学者は、本学を第一志望としているため、本学に関する情報に対するニーズが高いと推測され、何らかの形でオープンキャンパスに参加する可能性が考えられる。また、オープンキャンパスに参加したことを機に、本学への進学志望が強くなり、AO 入試という選抜区分を選んだ可能性もある。今後の課題として、志望決定に及ぼす影響という観点から、オープンキャンパスの効果を選抜種類別に検証することである。

各種オープンキャンパスの参加形態による入学した学部への志望決定の決め手率については、両方による参加経験者の割合が、一方だけの参加経験者よりも高いことが分かった。オープンキャンパスにオンラインと対面の両方での参加経験者は、リアルとバーチャルというモードの異なる複数の情報に触れることで、本学の理解が深まり、志望がより強く動機づけられた可能性が考えられる。オンラインと対面の相乗効果は、ハイブリッドといった物理的な複合だけではなく、個人の内面における体験の多元性といった点にも着目していく必要があるだろう。

また、どの学部においても、オンラインに比べて、対面による参加の方は志望決定の決め手率が高いことが確認できた。オンラインは対面に比べて、遠隔地からアクセスしやすいやコストが低いなどの長所はあるが、「実際に大学を訪れることでしか得られない実感や体験（宮本, 2022: 195）」は伝えきれないという短所がある。逆に、対面はこの点こそが長所であり、進学決定に及ぼす影響が大きいことが推測できる。1.1で紹介したように、東北大学では、現在の技術で実現可能な範囲で、対面オープンキャンパスでの体験をオンラインで再現することを試みてきたが、現時点ではオンライン形式で現実の体験とほぼ同等することは依然として難しい。

系別で決め手率をみると、医歯薬系の対面のみ参加者の決め手率が一番高かった。これも上記の対面でしかない実感・体験と関係があるかもしれない。対面で実施されるオープンキャンパスにおいて、人文社

会系や自然科学系に比べて、医歯薬系には救急体験、実験体験などの体験型のイベントが豊富にある。同じく対面実施であっても、体験型のイベントは情報伝達型のイベントより志望決定に正の影響を与える可能性が考えられる。

東北大学の第4期中期目標・中期計画には「アドミッション・ポリシーに合致した多様な学生を広く国内外から受け入れるため、オンラインと対面を融合した各種の高大接続プログラムを機動的に展開する」ことが掲げられている（東北大学, 2022）。ポストコロナ期に入った後にも、オンラインによるオープンキャンパスは新たな形式として、対面と併用して、継続されることが望まれるであろう。

これからは、各学部学科の対面オープンキャンパスのイベント開催状況や、オンラインオープンキャンパスのコンテンツ利用状況と志望決定の関係性を分析し、志願者獲得に有効な対面によるオープンキャンパスの企画やオンラインオープンキャンパスのコンテンツの開発に向けて検討していきたい。

本研究では、入学者を対象に、異なる参加形態によるオープンキャンパスの参加が志望決定の「決め手」として有効であるかを分析した。しかし、「決め手」としての効果をどう捉えるかには限界がある。「決め手」は、志望者が最終的に進路を決定する要因であり、オープンキャンパス以外にも合格可能性などの要因が関与していると考えられる。特に東北大学の場合、志望順位がもともと高いため、オープンキャンパスの参加による志望強化としての効果を測るのが難しい。志望順位が高いからこそ、積極的にオープンキャンパスに参加する可能性がある点も考慮すべきである。

また、大学への志望決定は単一の要因によるものではなく、プロセスを経て段階的に強まるため、オープンキャンパスが「決め手」となったかどうかだけでなく、志望がどのように形成・強化されたかという一連のプロセス全体を評価することが重要である。この視点は、入試広報活動の有効な実施を考える上でも必要であり、広報活動がどの段階でどのように効果を発揮するかを把握することが、今後の改善に繋がると考えられる。

注

- 1) 文部科学省が2021年より「AO入試」の名称を「総合型選抜」に変更したが、東北大学では引き続き「AO入試（総合型選抜）」としている。本文では「AO」ないしは「AO入試」と表記する。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP21H04409, JP24K16703 の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

- 久保沙織・宮本友弘・倉元直樹・長濱裕幸 (2023). 「東北大学志望に及ぼすオンラインオープンキャンパスの効果 —新入学者アンケートの結果から—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』**9**, 111–117.
- 倉元直樹・宮本友弘・久保沙織・南紅玉 (2020). 「東北大学における入試広報活動の『これまで』と『これから』—頂点への軌跡からオンライン展開への挑戦へ—」『教育情報学研究』**19**, 55–69.
- 林如玉・宮本友弘・久保沙織・倉元直樹・長濱裕幸 (2024). 「入試広報戦略立案のための東北大学合格者に関する分析—相談相手と志望順位の地域別比較—」『教育情報学研究』**22**, 55–63.
- 宮本友弘 (2022). 「コロナ禍での対面オープンキャンパスへの挑戦」倉元直樹・宮本友弘編『コロナ禍に挑む大学入試 (1) 緊急対応編』金子書房, 194–199.
- 三好登 (2022). 「COVID-19 禍における高校生の進学希望の変化に与えるオンラインオープンキャンパスの効果研究」『大学入試研究ジャーナル』**32**, 165–172.
- 永田純一・三好登・杉原敏彦・竹内正興 (2022). 「オンライン入試広報活動の課題と展望—広島大学を事例に—」『大学入試研究ジャーナル』**32**, 265–270.
- 臨時教育審議会 (1985). 「教育改革に関する答申—臨時教育審議会第一次～第四次 (最終) 答申—」.大蔵省印刷局.
- 田崎優里・山田恭子・浦崎直光 (2023). 「WEB 型オープンキャンパスの特徴と効果——来場型オープンキャンパスとの差異に着目して——」『大学入試研究ジャーナル』**33**, 1–6.
- 東北大学 (2022). 「国立大学法人東北大学第 4 期中期計画」
<https://www.bureau.tohoku.ac.jp/kohyo/kicho/chukikeikaku2022.pdf> (2024 年 4 月 30 日).